

【第六回】「毛筆の基礎・基本とその書き方」

— 文字のおさめ方を考える (2) —

静岡大学教授
本誌手本揮毫者

杉崎 哲子

◇はじめに

通常は、半紙で学習されている方が多いことと思われます。しかし、書は多様であり、様々なサイズの用紙に書かれます。展覧会や競書でも、半紙以外のサイズの用紙に書くことがあるでしょう。

今回は、様々な用紙でのおさめ方（納め方・収め方）、全体構成について学習します。

■最終の完成形を思い描く

何かしら、ものを作り上げる時には、最終的な完成形を思い描いて取り掛かることと思えます。それは、書作品を作る場合にも共通しています。

えることです。

ところが、一つの文字の、ある画の筆の入れ方にこだわるあまり、先に進めなくなったり、細部にばかり意識が向いて完成形を見失ってしまったりすることが、あるものです。

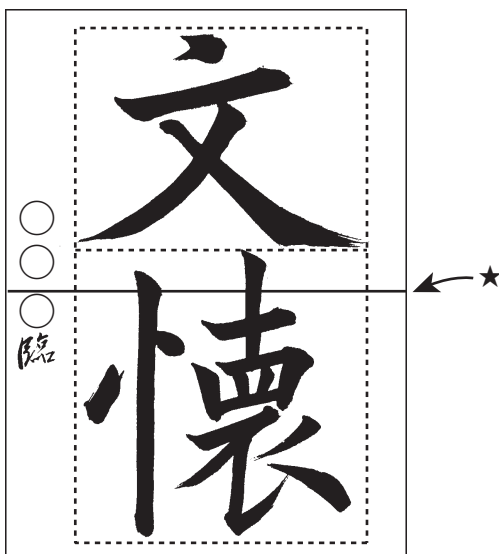
前回、半紙へのおさめ方の一般的な注意点を解説しましたので、ここでは、本誌の過去の段位認定試験の作品を例にして、具体的に考えていくことにしましょう。

■半紙へのおさめ方のポイント

まず、半紙サイズにおさめる場合について、具体例を見ながら順に確かめましょう。

○文字の大きさ

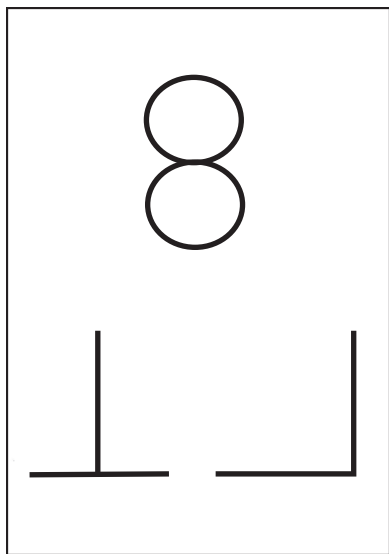
課題の文字が二文字の場合、半紙を半分に折ることについては、注意が必要です。例えば、



左の「文懐」という作品では、画数の少ない「文」と「懐」との大きさを考えると、二つの文字を同じ大きさにはできないことは一目瞭然です。しかし、半分に折った折り目(★)を目安にして、「文」をそれよりも上部でおさめるというように考えることができます。

この場合には、「懐」を大きく書くので問題ないですが、例えば、同じような大きさの文字が並ぶ場合には、下方が少し大きいと安定します。それが視覚心理の面白いところで、平面に記された文字や図形であっても、そこに重さを感じるのです(同じ大きさの○を二つ合わせて作った「8」の字は、上の○が大きく見えてしまうので、一般的な活字の数字の「8」は、下の○を大きく書きます)。

また、水平線(横)と垂直線(縦)が同じ長さであっても、立っている方が長く見える(これを上方距離の過大視といいます)ため、「懐」の縦画が強調され、古典の特徴が際立っています。



○行の中心

文字の中心を行の中心に合わせることで、複数文字の中心をそろえることができます。中心が分かりにくい文字の場合には、概形(外

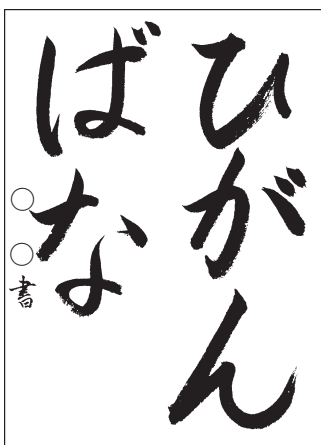
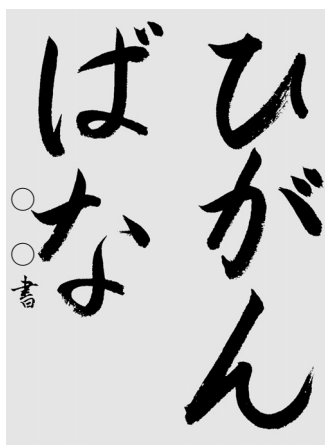
形)をとらえてから中心を定めます。

「大きさ」と「中心」は、月例の競書に取り組み際にも、常に意識をしておきましょう。

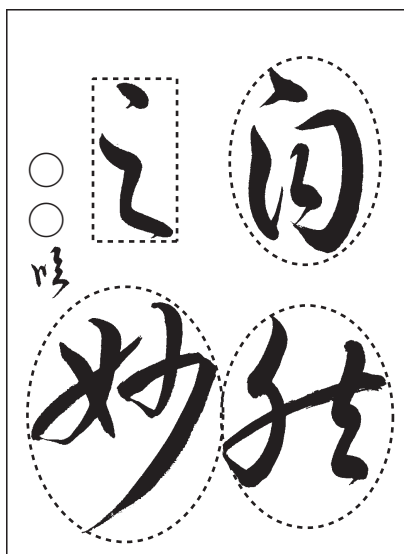
○行の間

二行で書く場合には、行間が広いと、文字が外に逃げていってしまいます。この作品では行間を少し狭めるだけで、「ひがなばな」という一つの言葉としてのまとまりが強まります。

あらかじめ、二行の中心を確認しておくといでしょう。

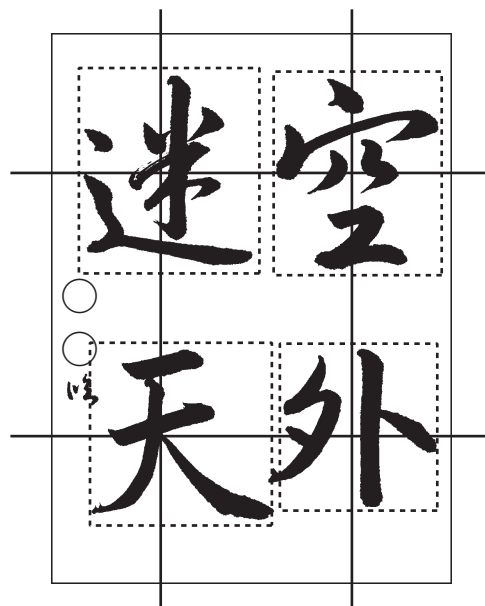


また、大きさに差のある「書譜」の四文字「自然之妙」では、二行目を少し広めに確保することによって、「妙」の女偏の「右上払い」の部分左側に大きく張り出すという特徴をとらえやすくして、名前の位置にも工夫して素晴らしいおさめ方をしています。このように、課題語句の概形を確認し、それに対応させて行の幅を決めるということも必要です。



○重心(横の中心)

四文字の場合、横の中心(重心)にも注意が必要になります。その点で、次頁の作品は、四文字の大きさを同じようにとらえて縦に中心を通しているだけでなく、横に並んだ「空」と「迷」、「外」と「天」の重心をそろえて、うまく並列におさめています。



○古典の特徴を生かす

前回、「顔法」の臨書では、少し大きめに書くことによって、古典の特徴が強調されることがあると説明しましたが、この「同行大徳」と



いう作品の堂々とした書きぶりも特徴をとらえているとあってよいでしょう。ただ、一回り小さくして行を意識しておさめると、周囲の「白」によって文字としてのまとまりが際立つことも理解してもらいたいと思います。



その意味では、次に挙げる「風信帖」は、

個々の文字が大きいので、文字の求心性という点で惜しい気がします。ただ、この場合は、線の細い部分があることによって、明るさが生まれているといえるでしょう。いずれにしても、書きまとめる段階では、大きさを覚えてみて印象を比較し、古典の特徴にあったおさめ方を考えましょう。



■用紙の寸法

漢字の書の作品制作には、画仙紙（画宣紙）がよく用いられます。

この用紙は、切り方によって次のような名称で呼ばれています。

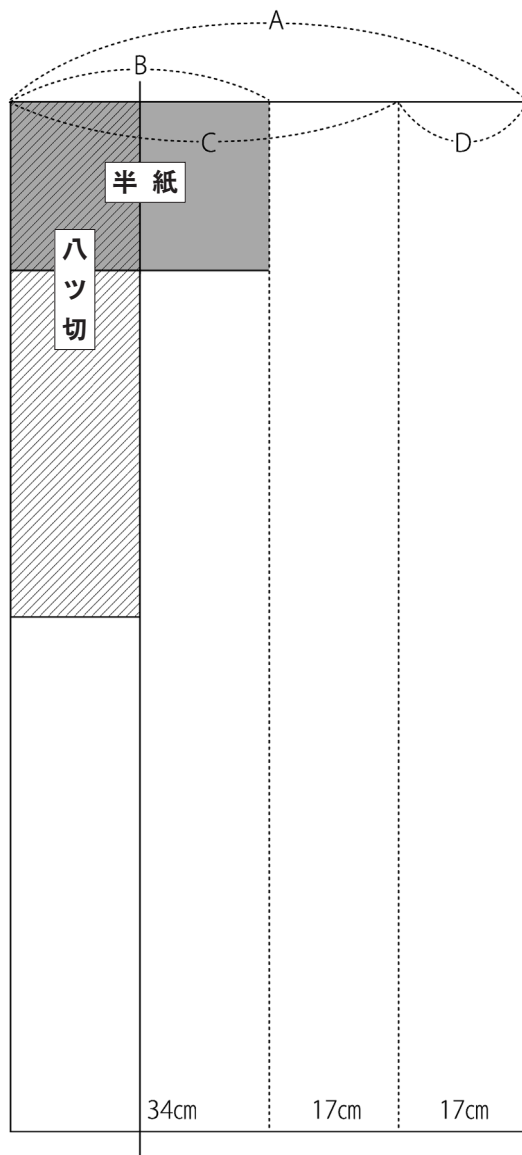
- A：全紙Ⅱ（約六八×一三六センチ）
- B：半切Ⅱ（約三四×一三六センチ）
- C：聯落Ⅱ（約五一×一三六センチ）
- D：聯Ⅱ（約一七×一三六センチ）

次頁の図で、それぞれの大きさを確認してください。本紙の段位認定試験では、「八ツ切（約六八×一七センチ）」が四段から、半切は、七段以上の課題になっています。

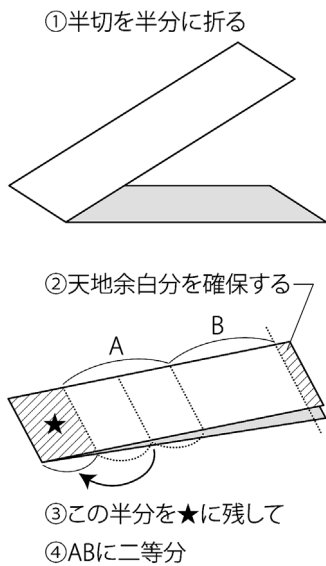
■「画仙紙ハツ切」へのおさめ方

通常の練習で使う半紙を横置きにすると、半切には六枚並べることができるので、半切三分の一は半紙2枚分と同じ、半紙を拡大した縦横比になっています。ハツ切は、半紙横置きの高さが横幅になります。

さて、このハツ切に書く課題の場合、大ききの目安として、紙をどのように折るとよいでしょうか。例年、五〜六文字を書く課題が出題されています。縦がさほど長くないハツ切は、書くスペースが減ってしまうため、あらかじめ天地を折ることはしなくてもよいですが、天地の余白に対する意識は重要です。



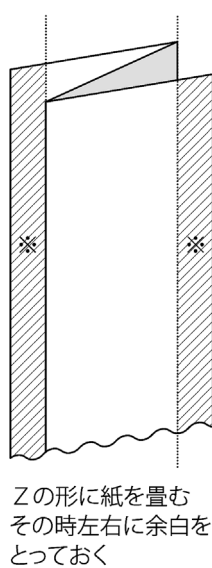
六文字は、先に半分に折って、さらに三分の一のところで折ると、一文字の大きさの目安になります。五文字や七文字といった奇数の文字数をおさめる場合には、最初に半分に折ったあとで、図のようにして、折り目をつけることになります。半切も同じ要領で奇数に分割できます。



文字数に合わせて紙を分割する方法は、あく

■行を作る

ハツ切や半切等、縦に長い用紙に二行以上でおさめる場合、二行の場合は半分に折るだけで、三行の場合には左右の余白を意識しながら、左図のように畳んで折り目をつけます。



め、触れることにします。仮名作品のおさめ方については、回をあらためて、触れることにします。

までも大きさを決めるための基準です。文字に大小の変化をつける場合には、その折り目によって混乱することもありうるので、気をつけましょう。

